続膝栗毛による草津道・榛名道

—古道の歴史地理—

川　崎　　敏

Ⅰ　はしがき

十返舎一九は文化7年（1810）に初編『金昆羅参詣』文化8年に二編『宮島参詣』を発刊後，文化9年から文化13年の間に『木曽街道』を三編から七編にわたって発刊し，さらに文化13年から文政5年までに八編『従木曽街道善光寺道中』九編『善光寺道中』十編『上州草津道中』十一編十二編『中山道中』を『続膝栗毛』として発刊している。

本論はそのうちの十編『上州草津道中』と十一編『中山道中』を引用して古道の考証を行った。十編は善光寺より草津温泉まで，十一編は草津より榛名山をへて新町（高崎）まで記されてある。この『続膝栗毛』は芭蕉の『奥の細道』や『更科日記』と比較すれば文学的価値は低いが，地名や道中の風物を庶民的に描写しており，宿泊した場所を丹念に書きとどめている。この点において地理的に価値が高い。

古道は自然を巧みに利用し，自然に順応してつくられた。しかも古道は人間の歴史的風土的な二重構造の中に存在し，その時代における人間のつくった最高部類に属する人間の文化である。1本の道は支脈を延ばして拡大し，古い道は新しい道と変化しつつあるが，それは時間的・空間的構造の中において変化している。筆者は40年間にわたって，部分的であるが古道を歩く機会を得た。今では消滅したものもあるが，一部に残存して昔の面影を残しているものがある。特に草津道と榛名道はそれが著しいので，その時間的・空間的関係において，この古道を調べてみた。ここには古来より有名な草津温泉集落と榛名神社の御師・社僧集落があるので，それが古道とどんな関係をもっているか，また奥上州の古道はどんなであったかを追求してみる。そして時代的には文化文政ごろの旅と山地交通を，地形的には火山地形と古道との関係を考察した。この地方の調査は昭和5年に始まり，その後は昭和13年・35年・44年に亘って行った。

古典を引用した歴史学的研究は進んでいるが，古典を引用した歴史地理学的研究はほとんど行なわれていない。本論はその意味において新しい試みとして執筆したものである。なお本論は筆者が最近発表した『木曽街道』[①]と姉妹篇であり，歴史地理学的研究[②〜⑥]の続篇でもある。

Ⅱ　善光寺より草津へ

『上州草津道中』はその冒頭に『春[⑦]の鶯はいふも更なり，空をかける時鳥（ほととぎす）さえ，青葉ふく軒にちがつき，木尊かけたかの声珍らしからぬ信濃路の旅にうかれゆかば，鶏の卵に気力を得るばかり，初松魚（はつかつお）といえるものは夢にも見ず，されども若鮎の生きてはたらく犀川の流れに，金色の光を放つ，善光寺如来の利益は蒙らぬものなき街道の賑ひ，往来の貴賤ひきもきらさず駅々の繁昌仏都の功，有りがたく弥次郎兵衛喜多八ここに一宿してより……』と記して信濃路や善光寺の景観を描写し，さらに『ここに一夜して上州草津の温泉におもむかんとて，道のほど尋ねあわせ，福島といえる所まで案内人をたのみ，すこし荷物を負せ，さきたてて立出けるが，そもそもこの街道は大笹越とて，草津まで十八里のあいだ山道にして仁礼，田代，大笹の三駅の外，旅人の宿なく難渋の地のみなりと，きくものから朝とくより星をいただき，善光寺の宿をたち出，福島近くになりて夜したるに，此の辺田の水あふれて，往来道あしく，案内の人いかがしけん，二度まで転び倒れければ見る人もなく，声をあげて咲（わら）ふにぞ，弥次郎兵衛取り敢ず「こねかへす道のわるさに荷物までべたりべたりと尻もちをつく」……』

福島（標高390m）は千曲川左岸の自然堤防上の微高地に発達した渡頭集落で，善光寺より10kmの地点にある。その間の地名は記してないが，おそらく旧古牧村や旧朝陽村を通って，右岸の上屋島から千曲川を越して，左岸の福島に至ったと思われる。

北屋島も千曲川の自然堤防上に発達したところで付近には畑が多く，右岸の渡頭集落である。この北屋島と福島は渡頭対向集落として発達した。自然堤防の後背地は氾濫原で浮地形をなして低く水田地帯となっており，ここを通過する時，『案内人が二度まで転び』とある如く，また『こね返す道のわるさ』とあるように，後背低地の地形と道路の関係をよく描写している。続膝栗毛の旅日記には月日が記してないが，初夏の候であるから，出水のため低地は道路がわるかったと思われる。

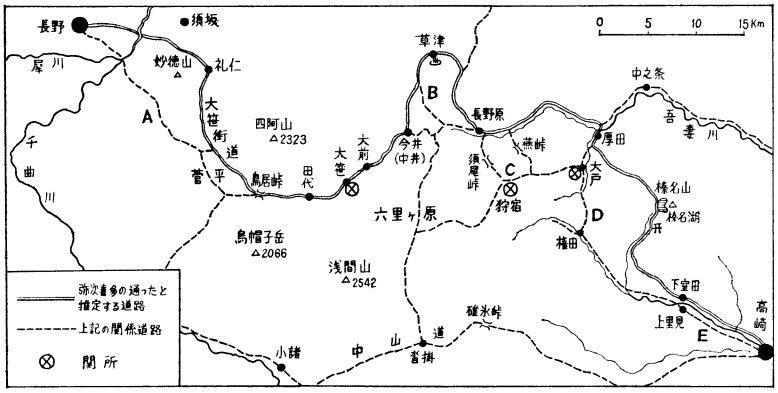
これより弥次喜多は，百々川扇状地の末端にある井上を通って，妙高山から流出する川によってつくられた小扇状地の扇端にある八町を過ぎ，栃倉をへて仁礼（標高550m）に至っている。この間，善光寺を出て福島まで10km，福島から井上まで2km，井上から仁礼まで8kmあるから合計20km歩いたことになる。

仁礼は大笹街道の入口にある宿場で，これより田代の宿場まで24kmはほとんど集落がない。奥上州の人たちは善光寺詣りにこの道を選び善光寺街道といった。奥上州からは中山道廻りよりはるかに近い。『これより中の沢という

を打すぎ，渋沢の建場に至る。此の所も谷間に只一軒ありて，六十あまりのむらくろしき親仁，不肖々々に茶をくみきたる。「おのづから人の心もなきぬるさ茶も渋沢の山家そだち」ここにしばらく休み，立ち出たる』と記し，また『仁礼宿より大明神へ二里，大みようじんより中沢へ一里，中の沢より渋沢へ一里，渋沢より田代へ二里と記しているが，合計24kmとなる。

仁礼より大明神（標高800m）までは，熊窪山と梯子山の山峡，これを越して中之沢（標高1,300m）までが菅平である。菅平は現在，高原避暑地として開発され，昔の面影は全くないが，当時は荒涼たる高原地帯であったと推定する。今では長野市から菅平に入るには保科を通って窓岩峠（標高1,100m）を越す近道ができたが，バス路線などの主要街道としては，今なお大笹街道が使用されている。昭和5年には窓岩峠の道は僅か開けていたが，車は通過出来ず徒歩で越さなければならなかった。江戸時代には徒歩でも通過出来なかったと思われる。道路建設技術の進歩によって，この難所が漸次，新道として利用され，長野・菅平間は大笹街道よりも8kmほど短縮された。

続膝栗毛の草津道と榛名道



Aは大笹街道よりも交通量が多くなった新道，Bは草津温泉に通ずる新道，Cは草津街道と称せられた峠越しの古道，DとEは古い草津街道

旧道は大明神より四阿(あづま)山や根子岳の山腹を通って（現在の生物研究所付近）中之沢の渓流を横切り，標高1,416mの地点を通過して渋沢（標高1,200m）に至っている。弥次喜多はこの旧道を通って渋沢に達したにちがいない。それはこの道路の南の菅平口を通るよりも5kmも近く，しかも菅平口を通過するには，大洞の渓間を通らなければならない。渋沢は現在の渋沢の集落よりも2km東の鳥居峠（標高1,362m）の麓と思われる。即ち旧道と菅平口方面から来る道路との会合点の付近かと思われる。これより鳥居峠を越す（112m上昇）と浅間山の北側につらなる高原地帯となる。ここに田代（標高1,100m）がある。『すべてこの間，村里見えず，浅間のうしろ道にて樹木さらになく芝原の峰なり』と記しているが，当時の景観をよく描写している。

『はやくも田代のしゆくにつけば，はやその日は七ツさがりなれば，このしゆくにとまらんとて，はたごやを見つけて，北「サアサアむこうのうちへとまろう……」……』とここで弥次喜多は一泊することになる。彼等の旅した時期は明確に記してないが，初夏であるから昼の長い季節に，善光寺を暗いうちに出発し，10km歩いて福島で夜が明け，田代には16時に着いたことになる。1日約44kmという長距離の行程であった。しかも山道を渉破したのである。田代は吾妻川の上流に近い高原上にあり，それより吾妻川に沿って崖下を通り，大笹(標高920m)に出ている。田代・大笹間の距離は6km，高低の差は80mであるが，地形的には浸食谷を通らねばならない。

『これよりはや大笹の駅にいたる。この所はいたって繁昌の地にして商家あまた軒をつらね，旅篭屋にも中尾といへる殊に賑敷みいたり。「繁昌の土地をえらびて商人の根のはびこる大笹の宿」……』大笹は文化文政時代にすでに裏浅間の中心集落であった。今ではこの大笹より六里ケ原を横切り，軽井沢に至る新道が通じている。また付近から高冷地野菜の栽培も行なわれ，田代から大笹にかけて50ha以上のキャベツ畑や白菜畑がみられ，乳牛も飼われている。江戸時代には養蚕をやっており，明治から大正にかけては養蚕業中心の集落であった。

『やがて大前，中井などというところを打すぎて，ほどなく草津の温泉にぞいたりける。「生茂る夏の草津に来てみれば今をさかりとひらく湯の花」……』大笹から大前(標高800m)まで4km，それより中井をへて草津に至っている。中井は現在の今井ではなかろうか。弥次喜多は今井を中井と聞き間違えたか明らかでないが，中井という地名は見当らない。この今井（標高700m）とすれば，ここから石津川に沿って北上し，石津（標高1010m）まで距離にして4km上昇して，それからほとんど平坦な高原地帯となる。若し現在の如く大津（標高680m）廻りとすれば，滝ノ上の渓谷を通らなければならないし，7～8kmも遠廻りとなり，それに立石・洞口をへて遅沢を越し，谷所に出なければならない。よって弥次喜多は石津廻りを選んだと推定する。現在軽井沢や高崎方面から草津に行くには，大津廻りの新道ができ，今井からの石津廻りは利用されなくなってしまった。軽井沢・草津間に軽便鉄道が1929年につくられたのも，この大津を通る新道に沿ったところである。

Ⅲ　草津から榛名山をへて高崎へ

『上毛の国草津は，むかし養老年間行基ぼさつのひらき給う温泉とかや，まことに海内無双の霊湯にして諸病に験なる事，普く人のしるところなれば，遠近の旅客ここに入りつどひて，宿場の繁昌いふばかりなく，中にも湯本安兵衛，黒岩忠右衛門など，ことに家居花麗をつくし，風流の貴客絶えず……』と記し，十編下冊はほとんど湯治風景が描写されてある。草津温泉は僧行基が1,200年前に開く以前から知られていたともいわれ，西の有馬温泉に対し，東の草津温泉として名高く，日本でも最も古い部類に属する温泉であった。特に建久4年（1193）8月源頼朝が浅間山麓に遊猟した時，この温泉に家来の細野幸久をして湯本の姓を与えて，温泉を守らせてから有名になったといわれている。頼朝入浴は東鑑・曽我物語にも記され，また堯慧法師の北国紀行，宗祇法師の終焉記，宗長の東路裏などにも記され，前田利家の如きは天正年間（1573年ごろ）に60日も滞在していたという。これからみると温泉湯治のため鎌倉・室町時代から山道が開かれたことが想像できる。

弥次喜多はしばらく滞在して『さすが古郷なつかしく，草津湯治もそこそこにして，諸払万事に残りすくなく路用をつかひて，これよりあてはめたる道中，心ぼそくも草津を立ち出，長の原さしてぞたどりける。「ふさぐ気の草津出ればふところもさみしく夏の旅ぞものうき」……』草津から長野原12kmの間は，現在の草津街道である遅沢に沿って，洞口・立石・大津をへて長野原（標高650m）に至る道を通ったか，草津から尾沼・小雨・大子（おおし）・八幡・下沢をへて長野原の東に出たか，その間の地名が記されてないので明らかでない。距離はほとんど同じであるが，前者はほとんど集落がなかったと思われるのに対し，後者は須川筋が早く開かれて農村があった。それに草津から平坦なところを4km歩いて（現在の栗生楽泉園）80mおりると須川の谷に出られる。これより小雨・太子を通過すれば長野原の東にでることができる。長野原宿のことは全く記していないところからみても，後者の道を選んだと推定する。

『……「草津から高崎への街道だから，もうちっと往来がありそうなものだが，なんだか淋しい。コリア道がちがやァしめいか」旅の男「ハハアおまいがたア，くさつがへりだなあ。長はらから菅尾へいくをとりちがへて，こっちへ来たんだなあ」弥「だうりでをかしな道だと思った」……「もう七つさがりだ。草津でいふには大戸泊だといったが，モシこれから大戸へはいくらほどありやすね」男「そりやアとんだことだ。どうして大戸へはいかれましない」北「そんならここらに宿やはねいかへ」男「中の条へござらにア，やどやアござんしないが，そこまでなから（およそ）三，四里はあんべい」……』弥次喜多は道を間違えて，吾妻川に沿って中之條に向う街道に入ってしまった。長野原から間もなく右折して，須賀尾峠（標高1,100m）を越して清水を通ると大戸へ達するのである。これが古くからの草津街道で，草津と高崎を結ぶ街道である。しかるに右折せず，川原畑か上組付近まで下ってしまった。今では渋川から入れば，この中之条と草津を結ぶ街道は，よく開けているが，当時は高崎から大戸宿を通って須賀尾峠または，燕峠（標高932m）を越して草津に入るのが近道であった。今では須賀尾峠とこれと並ぶ燕峠越の古道はほとんど利用されず，廃道のようになってしまった。それ故に古道が昔の姿で残存している。

弥次喜多は民家に宿泊することに決め，百姓家に一泊を乞うた。『……百姓「インネ蚕にかかったから，ざしきがふさがってござらア」弥「もとほかにとめる所はござりやすめいか」百姓「どこでもかいこ時分にヤアやどはしましない。此の向うのちくい（小さな）家へいって，きいて見さつしゃりまし。あそこにはようううべ（昨夜）順礼衆がとまったから」……さしづの家へ行ってみれば，壁はおちかかりし所へ，こもむしろなど引つり，やぶれ戸ゆがみながらに，たてつけ，屋根もこけむして草おい茂りたる家なれども，ほかに宿屋もなければ，ぜひなくここにても，たかが一夜をあかすことと内へはいりて……』ここで弥次喜多は一泊するが，地名を記していないので場所は不明である。吾妻川に沿った川原畑と郷原の間と推定する。この付近はこの頃養蚕をやって生計を立てていたようである。文化文政の頃は桐生・足利などの機業地帯が，さかんに絹織物を生産したので赤城・榛名・浅間の山麓地帯は至るところで養蚕が行なわれたのであろう。桐生・足利の絹織物の生産が飛躍的に発展したのは，この時代である。

『百姓の家に頼みて一夜をあかし，今朝たち出ても，往還にあらざれば行くさきわからず，高崎のかたへ出る道を聞けば，榛名山へまはりての順道なりと，郷原といへるをさしてゆく。「往来のみちをよこやへわら畑とりちがへたるかわらのしゆく」それより阿津田といへるを打過ぎて……』今では矢倉・郷原（標高480m）付近はよく開けているが，当時としては宿場として発達するほど交通量は多くなく，山間に僅か農家があった程度と思われる。阿津田は今では厚田と書き，吾妻川とその支流温（ぬる）川の会合点，郷原から吾妻川を渡っての対岸である。その地点は厚田の田中か新井の付近と推定する。弥次喜多はここで吾妻川を渡り，温川に沿って南下するが，出水のため難渋している。『所の人「あとへもどって大戸へ出ていかっしゃい」北「ソリヤアよっぽどまわりかね」所の人「なから一里べいも戻るやうなもんであんべい」……あき人「…長渕へ出ていけと教へたのであんべい，わしにくっついて，ござらしやい，わしは榛名のほうへいくもんでございさア」……』この間のことはよく理解できないが，登山路でない道に入り込んでしまったのではあるまいか。出水のため厚田と大戸の間で，思うように歩けなかったので，榛名山麓に沿って歩くうち道に迷ったのであろう。此の付近の道は不完全な山道であったと思われる。江戸から高崎を通って草津に入る草津街道（高崎―上里見―三倉―梅田―大戸―須賀尾峠―

長野原一草津）は一応完備しておったであろうが，そこからはずれると道らしい道がなかったと推定する。『長淵へ出てゆけと教えたのであんべい』の長淵は現在の長藤（標高670m）と思われる。すなわち厚田一兵庫一長藤一榛名山，これが今でも西北から徒歩で榛名山に登る道となっている。榛名山に登るには他の登山道よりやや短いが，急傾斜のところがある。よって現在の自動車道は中之条の近くの川戸から，榛名山の中腹を通って長森に出て，これより榛名山に登っている。

『……みちをいそぎゆくに，やうやうとはる名池といふにいたる。これはいたって大池にて，おもしろき岩どもありて，けしきよきところなり。ひだりのかた，いかほの沼あり折ふし夕立しけるに「名だちの雲はうつりて水の面すみをながせるいかほの沼かな」……』榛名湖は標高湖面1,084mで榛名富士を前面にみる絶佳の場所である。

『これより榛名山にのぼりて御宮に参詣して「早蕨のこぶしに人の欲づらをはる名の神の誓ひたふとき」……』榛名富士は標高1,391mで，二重式火山の中央火口丘を形成し，円錐形の美しい火山である。頂上に榛名神社の奥の院があるが，今ではケーブルカーがあって容易に登ることができる。弥次喜多は御原より厚田をへて外輪山を登り，更にこの火口丘に登った。湖面から207mの開析の進まない火山である。これより2km南側におりると榛名神社の本殿がある。

『末社摂社残らず順拝して，しばらく隙どりたるに，はや日も西に傾きたれば，お師のかたに頼み一宿し……』榛名神社は火産霊神のほか六神をまつり，用明帝（586）のころからあって，中世は国内六ノ宮として敬まわれ，満行権現ともいった古い神社である。本殿は標高750mの榛名山腹にあるが，3,100の社家社僧をもっていた。この地域は開析谷の比較的広いところで，しかも榛名川上流の水源地を設定してつくられている。社殿の洞は熔岩によってできたもので，神体岩は熔岩である。これも火山につくられた神社として特色がある。嘉永3年(1850)の絵図には道路の西側に44坊，東側に49坊が描かれて，社家町と社僧町に分けられ，前者は御師としての坊が集まり，後者は鳥居前および宿身門の内側地域にみられる。[8] もとは山麓を中心として室田をはじめ各登山口付近に点在分布していたと思われるが，近世中期以後になると一般民衆の榛名信仰がさかんになるにつれて，増加した参詣人を宿泊させるために門前に集結した。現在は旅館や土産物を売る店が50軒も軒をならべて並んでいる。

『あくる日とく立いでて，諸田というを打過，中山道高崎駅にぞ出たりける。格別往来賑ひければ「はやぶさの高崎なれやとぶ鳥もおつるばかりの宿のいきほい」……それよりくらがりのしゆくにいたりければ……かくて新町駅にさしかかりたるに，やど引「あなたがたおとまりかな」弥「わつちらア多羅福屋へとまりやす」やど引「わたくしたらふくやでござります，御あんないいたしましよう』諸田は今の室田で，弥次喜多は八本松を通って室田へ出ている。この登山道は火山の開析谷を利用した古道で，神社建立と同時に開かれた登山道である。現在は改修されて昔の面影を残していない。この道路に沿った榛名川は，本庄で烏川と合流している。高崎からの登山道はこの烏川に沿って室田に出て，八本松付近から榛名川に沿って登った。下室田は初期における榛名信仰の拠点で御師が住んでいたといわれている。下室田の対岸に烏川の対向集落上里見があるが，ここから奥上州の長野原や中之条に通じ，また草津に向う草津街道がある。この草津街道は上里見から本庄・権田をへて，烏川の支流長井川の谷をのぼり萩生をへて大戸に達し，草津に至る。

Ⅳ　むすび

古道はその時代における自然と人間の関係を明瞭に示している。山間の道路も時代とともに変化し，古道が新道に代ってゆくが，文化文政時代の道路はどうであったか，弥次喜多の通った道を『続膝栗毛』によって調べてみると当時の様相が解る。

（1）古道と地形との関係をみると，弥次喜多の通った草津道・榛名道は種々な地形を巧みに利用している。特に火山地形や河岸段丘を道路として利用しているところが多い。千曲川の氾濫原を通過する所は道路の泥濘に悩まされているが，道路のかさあげの不充分な時代においては，低地の交通は難渋した。特に夏季の出水時においては，東海道や中山道においても同じように悩まされている。

善光寺から草津に行くのに仁礼から筑摩山地の熊窪山と梯子山の狭隘をぬけると，根子岳と四阿(あづま)山の火山噴出物が，筑摩山地にかぶさっているので，僅か下降するだけで菅平に入ることができる。仁礼から峠まで6kmの距離の間に600m上昇しなければならないのに，下降は100m下らなくてもよい。菅平は根子岳の輝石安山岩でできたアスピーテ式火山の裾野が筑摩山地に接したところで，標高1,300m内外の高原，しかも火山灰や火山砕屑物が堆積している。この地形を利用して古道は，開析の進まない根子岳の裾野を標高1,340mの線に沿って一直線に東南に向っている。その間二つの開析谷（大明神沢・中之沢）を通過するが，ここではこの田切地形を横断するため，僅か上流を迂廻せねばならなかった。これより現在の北信牧場になっている緩やかなスロープの末端を通りぬけて鳥居峠に出る。鳥居峠は標高1,362mであるが，麓の滝ノ入沢がすでに標高1,250mであるから，僅か112m登るだけで容易に越すことができる。

また上州側も浅間山の噴出物が堆積しているので，峠からほとんど降りる必要がない。坦々たる高原地帯を6km歩けば田代に達することができる。この付近は吾妻川の最上流部であるが，田代付近は開析が進まず平坦面である。しかし田代から下流は浸食がはげしく60～80mの峡谷を穿っているので，その渓谷に沿って崖下を通らねばならな

い。このような所が20kmにわたって連続している。これがこの街道の難所である。ここは草津白根火山と浅間火山の接合点を吾妻川が深く浸食し，メアンダーしているところで，火山の噴出の時期や噴出物の相違と噴出物の開析が，このような複雑した地形を形成した。

田代より大笹にでるには平坦面を2km行って崖下70mの地点に出るか，吾妻川が深く浸食した崖下の左岸を通らねばならない。そして支流大横川を渡ると左岸が通れないため，右岸に出る。右岸の段丘上にある大笹をすぎると再び左岸へ渡って，段丘上の大前に至り，さらに左岸から右岸へ，右岸から左岸へというように，吾妻川の沿岸を下らなければならない。しかもこの浸食谷は谷巾が極めて狭い。

天明3年（1783）の浅間山の噴火は溶岩を流して「鬼押し出し」をつくったが，さらに熔岩や火山礫・火山灰の泥流を北方に流下して吾妻川を堰き止め，火山灰を降らした。弥次喜多道中の40年前であるから，その噴出物も新しく，これが古道と間係をもっていたと思われる。

今井から北上すれば高原となって様相が一変し，古道は草津白根山の噴出した熔岩の南縁を通って草津に達している。上野原は吾妻山の段丘上にあり，林は王城山麓の小扇状を含むかなり広い段丘上にある。川原畑も同じく段丘上にあって，古道はこの段丘をつらねた左岸を走っている。しかしそれより東は吾妻渓谷といわれる難所となる。ここを通過すれば上郷付近から谷巾が広くなり，岩下・行沢・矢倉・郷原に至る。何れも段丘上で吾妻山麓に密着し，吾妻川を前面にもった日向集落である。

郷原から吾妻川を渡ると厚田に出るが，ここは榛名火山の山麓をぬって大戸と結ぶ古道がある。この付近は当時，夏季の出水時には，榛名山の開析谷から流れ出す川が温川に流れ込む箇所であふれ，往来を困難にしている。榛名山に北西から登るには兵庫（標高550m）から入ると長藤（標高670m）を通って，急傾斜を8km歩き，外輪山の掃部ケ岳と鬢櫛山の中間に出る。外輪山にかこまれたカルデラの周辺は1,090mで，中央火口丘の榛名富士を中心とした風景絶佳のところである。このような環境が榛名信仰と結びついて，民衆を集め古道を開かせたのである。

湖畔から榛名神社に至る古道は天神峠から九折岩を通っているが，新道は迂廻して，それより西を通って社家町に至っている。社家町から八本松までは古道が新道に改められて一致しているが，それより南は旧道と新道が一致していない。それは八本松までは旧道を新道とする以外に地形的利用ができなかったためである。

（2）次に文化文政時代の信仰や温泉湯治を通して，古道との関係をみる。『おかげまいり』の伊勢信仰圏は，約60年周期をもって現われている。明和時代には近畿を中心として，東は関東を北限とし武蔵・上野・下野・常陸・上総に及んでいるが，文化文政時代になると関東は武蔵のみとなる。[9] もちろん出典の資料が問題であるが，文化文政ごろ関東地方においては，榛名信仰がさかんになり，榛名神社を中心とした信仰圏が確立されたようである，これが『おかげまいり』に影響したかどうか明らかでないが榛名信仰がすばらしい勢力をもっていたことは事実である。

榛名神社の門前には3,100の社家・社僧があったほど，多数の信者をもち，それに化政時代の観光旅行とが合致して，榛名登山が行なわれたと推定する。何時代においても旅と道路との関係は深いが，これが信者を中心とした宗教団体によって，信仰登山路が完備されたとみられる。このような現象は日本各地にみられたことは勿論で『善光寺まいり』もその一つの現われである。今なお各地に『善光寺街道』と呼称する道路が残存している。路傍の石仏なども その一つの現象である。

旅は温泉湯治のような慰安的なものが必ず附随するもので，これが草津温泉集落を発達させ，それに向う道路の建設が温泉関係者によって建設されたと思われる。山道に残る草津街道はここに集る湯治客のために開かれた。

草津温泉は早くから武士や僧侶などの有名人が入浴し，鎌倉・室町時代に早くも草津街道が開かれた。江戸時代になると庶民化し，自炊して湯治する湯治客が集るようになって，上州農民の憩の場となった。江戸時代末期には『草津千軒』と称せられるほど発達したのは，このように温泉が一般化して多くの湯治客が集ったからであろう。特に明治から大正にかけて急速に発展し，1929年には早くも軽井沢から草津まで軽便鉄道が開かれたのをみても解る。[10] そして鉄道によって軽井沢から入るようになってから，かつての草津街道は衰えている。しかし昭和になって自動車交通がさかんになると，再び回春し道路が利用されるようになった。そのため古道は改装され消滅し，昔の面影が見られなくなった所が多い。ただ須賀尾峠のような所のみ残存している。

条里制の大規模な耕地整理の大工事の記録が全くないのと同じように，古道の工事に関する記録もほとんどない。ただ人間の残した古道だけが現実として残っている。草津道や榛名道のような山道は，踏分道から漸次人工が加えられたと推定する。道路としての人間と自然の関係は，その公共性から時間と空間の構造の中で法則性を樹立していったものと思われる。（市邨学園短期大学教授）

（本文は栗原教授の退官記念論文として，栗原博士に捧げる。）

註および参考文献

①川崎　敏（1971）：木曽街道――続膝栗毛その他による考証――市邨学園短期大学紀要　人文科学論集　第8号
②川崎　敏（1960）：幕末より明治初期における尾西機業の地域形成　地理学評論　33巻6号
③川崎　敏（1964）：産業革命期の尾西機業歴史地理学会紀要　6号

④川崎　敏（1966）：尾西毛織物工業地域の形成――大正・昭和初期　市邨学園短期大学紀要　社会科学論集　第２号
⑤川崎　敏（1970）：名古屋市における明治時代の工業化　歴史地理学会紀要　12号
⑥川崎　敏（1970）：木曽川の洪水と治水――元禄から宝暦までの自然と人間の関係――全国地理教育研究会紀要　　地理の広場　９号
⑦『　』の中は続膝栗毛の引用文。文字や送り仮名は原文によった。
⑧藤本利治（1970）：門前町　古今書院
⑨藤谷俊雄（1968）：おかげまいり　ええじゃないか　岩波書店
⑩1912年に渋川・中之条間に鉄道馬車が開かれ（1921年電化）ついで1945年には中之条から太子まで延長して，渋川から草津に入るのに便利になった。現在草津町の人口は6,100人，旅館71軒，約6,300人収容できる群馬県第一の温泉場である。